

出土遺物—人々が残した生活の痕跡

土器・陶磁器 柱穴・井戸・大溝等の遺構から出土しました。国産陶器の出土量が際立つ一方、土師器の出土は少なく、数片に限られます。国産陶器の大半は瀬戸・美濃焼(折縁皿(おりぶちざら)・丸皿等の小皿類や播鉢(すりばち)が主体)で、それに備前焼・信楽焼・常滑焼が続きます。また、中国産磁器(青磁の梅瓶(めいびん)、白磁の皿、青花(せいか)の碗・皿等)も少数見つかりました。

瓦 大溝内・井戸等から出土しました。大半は丸瓦・平瓦ですが、わずかながら軒丸瓦・軒平瓦も見受けられます。これらは焼きが甘く、厚みが薄い特徴があり、それは山上部で出土した瓦と共通します。

その他 大溝からは土器・陶磁器・瓦以外にもさまざまな遺物が出土しました。溝の堆積土からは小柄(こづか:長刀に付属する小刀)が見つかりました。また、溝の底付近からは多数の石仏や、五輪塔の部材が投棄されたような状態で出土しました。

おわりに

◆平成30年度の調査成果を以下にまとめます。

- ①掘立柱建物跡など城下町関連遺構を検出。
- ②内堀の構造・土塁の残存状況を確認。
- ③絵図にない大規模な溝を検出。

◆令和元年度の調査では、これまでに存在が知られていなかった橋台(きょうだい)遺構とその延長線上に東西方向の道路の痕跡が見つかりました。橋台は栗石(くりいし)を伴った石積みによって築かれていました。この橋台から東西道路を西に延長すると内堀につきあたり、それを越えると城内(武家屋敷地)に至ります。こうした位置関係から、今回みつかった道路遺構は城下町と城内を結ぶ重要なルートであったことが想定されます(橋台遺構と東西道路についての詳細は下記QRコードからご覧いただけます)。

◆佐和山城跡の調査は次年度も引き続き実施する予定です。今後も機会を見て調査成果を皆様にお知らせしていきたいと考えております。今後ともご協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。



瀬戸・美濃産瓶が出土した状況(大溝)



天目茶碗が出土した状況(大溝)



軒丸瓦が出土した状況(大溝)



五輪塔・石仏が出土した状況(大溝)

現地説明会(2019年9月実施)
の配布資料はこちらから



レトロ・レトロの展覧会 2019

冬の特別三二陳列

佐和山城の城下町を掘る ~三成さんの城下町~

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



はじめに

遺跡の概要 佐和山城跡(さわやま じょうあと)は彦根市北端に位置し、南北約4kmにわたって連なる佐和山丘陵の中央部に所在します。東側には近世朝鮮人街道(下街道)と近世中山道(東山道)の分岐点があり、西側には松原内湖・琵琶湖をひかえた水陸交通の要衝でした。約1.5km南西には特別史跡彦根城跡が位置します。石田三成の居城として知られますが、その歴史は古く鎌倉時代に遡るとされています。戦国時代には江北の浅井氏と江南の六角氏との境目の城として抗争の最前線となりました。その後、城主は目まぐるしく替わりますが、三成が城主の際に城は最大規模になったと考えられています。関ヶ原の戦いで三成が敗れると、徳川家康の家臣・井伊直政が入城しますが、慶長9年(1604年)彦根城の築城に伴い廃城となりました。

調査の概要 佐和山城跡は山上曲輪(くるわ)群・山麓曲輪群・城下町の3つの区域に大別されます。このたび、遺跡の範囲内で国土交通省近畿地方整備局滋賀国道事務所により一般国道8号米原バイパス工事が計画されたため、それに先立ち城下町地区の発掘調査に平成30年度から着手し、現在も調査を継続中です。調査の結果、城下町関連遺構を検出したほか、それらに伴い様々な遺物が出土しました。

今回の展示 今回の「レトロ・レトロの展覧会2019」では、いままで実態のよくわからなかった佐和山城の城下町の様相を、平成30年度調査の成果を中心に紹介することにしましょう。

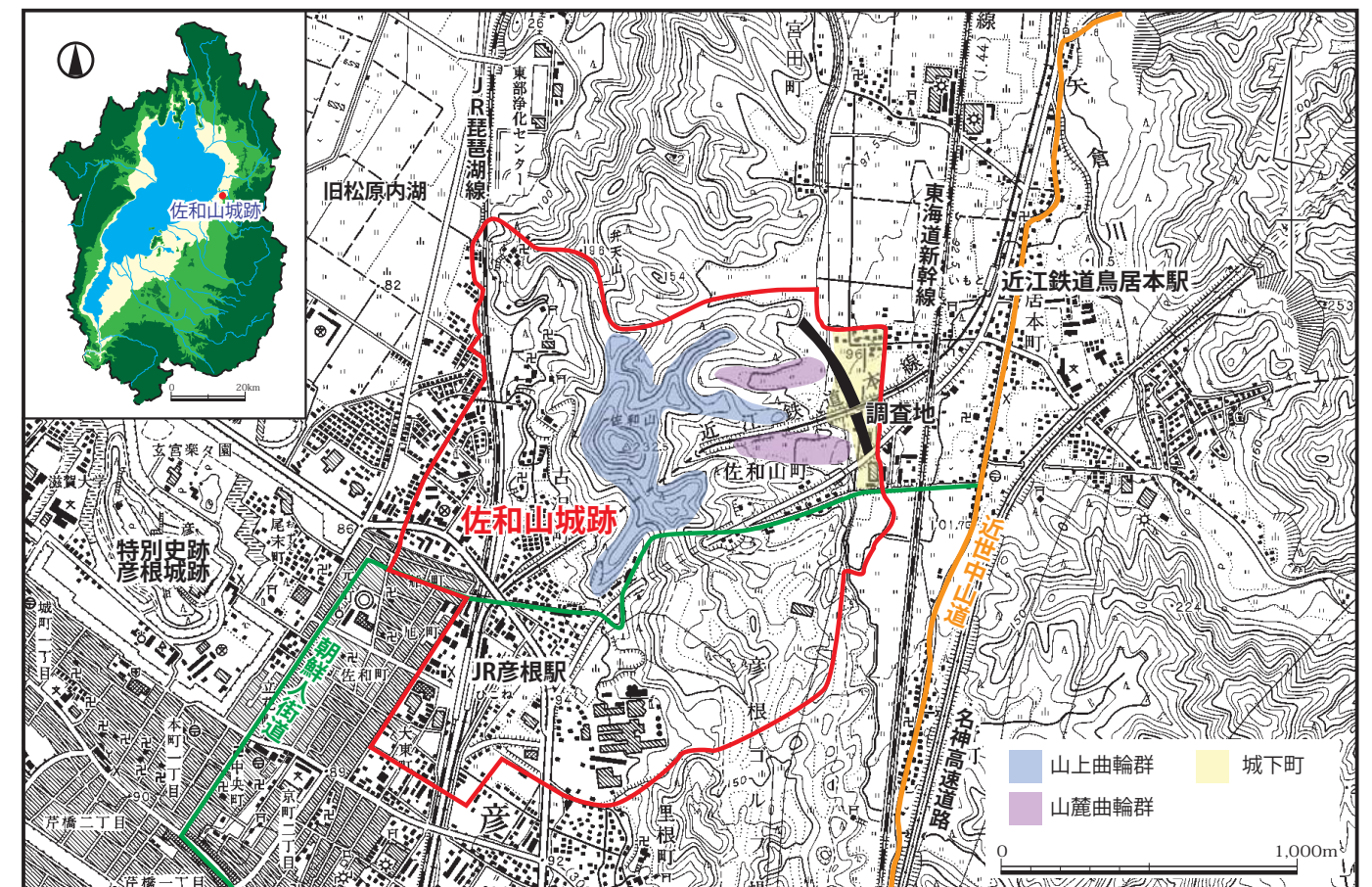


図1 佐和山城跡の範囲(赤枠)と今回の調査地点の位置(黒塗)

検出遺構・出土遺物

◆平成30年度調査では、城下町を南北に縦断し、メインストリートと推定されている「本町筋」から内堀にいたる間を中心に調査を実施しました。その結果、佐和山城に伴う内堀・土塁や、城下町に関係する掘立柱建物・井戸等の遺構を検出し、それらからさまざまな遺物が出土しました。出土遺物の時期は16世紀末から17世紀初頭頃を中心とするものです。



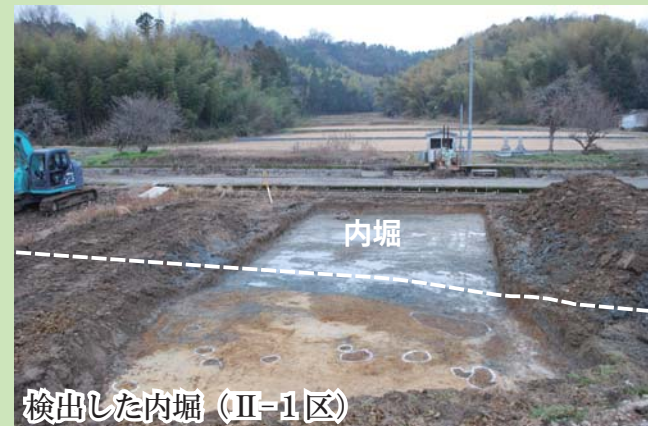
掘立柱建物 (II-3区) 各調査区では多数の柱穴を検出しました。写真は2棟の掘立柱建物が重なって見つかった状態。主軸は本町筋の軸と揃います。



検出した土塁 (III-5区)

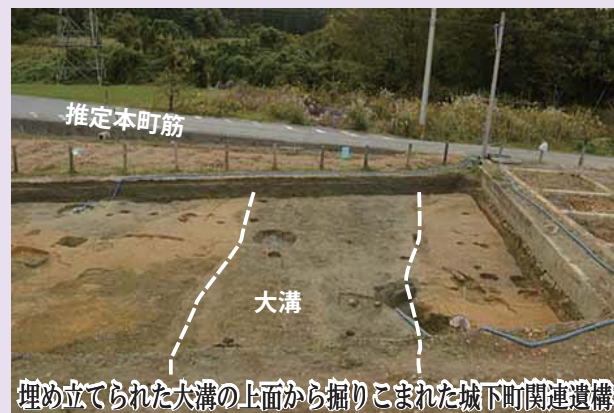


検出した内堀の屈曲部 (I-5区)



検出した内堀 (II-1区)

内堀 I-4・5区では、現西法寺川と平行して屈曲する内堀の北・東辺を確認できました。II-1区でも西法寺川と平行する内堀東辺を検出しました。これらの成果から、内堀の規模は幅約25m、深さ約0.7mと推定できました。



埋め立てられた大溝の上面から掘りこまれた城下町関連遺構



大溝の検出状況

大溝 (I-1区) 幅約7m、深さ約1mの大規模な溝です。南東から西に流れていたと考えられます。南から西へ大きく蛇行しますが、断面形状が台形に近く、自然流路に手を加えたと考えられます。少なくとも一度改修されています。城下町建設に伴って埋め立てられた後、上面に掘立柱建物が建てられました。水路として機能した時期の堆積土と、上部埋め立て土から出土した遺物の年代はともに16世紀末頃に位置付けられ、短期間のうちに改修・埋め立てが行われたと推定されます。



石組井戸 (I-1区) 城下町の町屋で生活用水を得るために掘削されたと考えられます。I-1区で2基、I-5・6区で2基、合計4基が見つかりました。いずれも井戸枠は佐和山周辺で採集できる自然石(チャート)を積み上げて作っています。なかには、それ以外の種類の石(花崗岩等)や五輪塔の部材を転用した例もありました。

図2 調査区配置図 (S=1:1250)

